

# 『おくのほそ道』の学習を通して、 「言葉の力」を実感しあい、 生きる力を育む学び合いの指導

松原 洋子

『おくのほそ道』執筆後、松尾芭蕉は「不易流行」を唱える。つまりそういう考えに至るきっかけを、この旅は持っていたということになる。「平泉」の場面の読解を中心にすえながら、学習者が仲間と意見交流を重ね、学び合い、「深い学び」へと思考を深化させていく様子を、ここに記した。そのさい、表現や対比の手法を意識することで、「言葉の力」を実感しあえるよう、指導に気を配った。

キーワード 『おくのほそ道』 松尾芭蕉 不易流行 学習の意欲 学び合い 深い学び  
さりとはかど 『万葉集』 志貴皇子 比べ読み

## 1 はじめに

中学3年生が国語学習で読む古典は、中学校の最後を飾るにふさわしい『おくのほそ道』である。今回は、『おくのほそ道』につながるように、「俳句」の歴史や近代の俳句、漢詩も取り入れた単元として取り組むことにした。

## 2 指導の計画

### 2.1 育成を目指す言語能力

- ・文章を読んで人間、社会、自然との関係について考え、人間としての生き方についてふれ、自分の意見をもつことのできる能力と態度（「C読むこと」指導事項エ・オ）
- ・歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむとともに、古文にあらわれたものの見方や考え方に触れることで、作者の思いなどを想像して読むことのできる能力と態度（「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」指導事項ア（ア）（イ））

### 2.2 単元名 いにしえの心と言葉を見つめる

### 2.3 単元の目標

- ①音読や暗唱をとおして、日本語のリズムのよさを実感する。
- ②俳句・漢詩・俳諧紀行文のそれぞれを読み、先人の視点や表現方法を学ぶことで、自分の生き方や表現法がどうあるべきか思考する。

### 2.4 単元の構成（全14時間扱い）

第1教材	近代の俳句（俳句の歴史も含める）	（4時間）
第2教材	漢詩	（4時間）
第3教材	おくのほそ道（松尾芭蕉 作）	（6時間）

### 2.5 単元設定の理由

俳句は今や日本が誇る文化である。幼児から高齢者まで、韻文に関して初心者からベテランまで、それぞれに創作ができる喜びを感じられるのは、世界を見回しても稀である。学習者はこれまでにいろいろな俳句を読み、創作も体験することで、季節を実感し、自己表現の方法を学んできた。中学3年ともなれば、先人の技や心を学ぶことで、伝統文化を意識したりこれからの新しい文化をどう築くか考えたりすることができるだろう。また、日本の伝統文化に多大なる影響力を持つ漢詩を学んだり、古文としての『おくのほそ道』を読んだりすることで、さまざまな文化のつながりを考えることもできる。

『おくのほそ道』は長い間人々に愛されてきた作品の一つであるので、この文章や俳句にふれ、日本人

にとって大切な文化財産であることを実感することが、国際理解学習にもつながっていくと考える。

## 2. 6 学習者の実態

俳句は小学生の時から学び続け、創作も行っている。中学校では毎年宿泊行事のうちにふれて俳句や短歌を創作させてきた。また、この学年は2年生時から「お〜いお茶新俳句大賞」（無季語でも可）に応募してきた。しかし、俳句について系統立てて学んではいない。そこで改めて、俳句を一つの芸術の域に高めた先人たちの俳句を学ぶことで、先人と対話し、彼らの視点や技をこれからの自分の創作に役立てようとする意識を持たせたい。そのさい、連歌（連句）を体験することで、俳句が生まれた経緯や文学に寄せる人々の熱い思いを追体験させ、俳句にさらに興味を持てるようにしていきたい。

漢文の読み方については既習ではあるが、まだまだ定着はしていない。漢詩の学習は初めてである。学習者にとってなかなか日常生活との結びつきがないが、「春眠暁を覚えず」や「国破れて山河あり」など、一つのフレーズとして日常生活に溶け込んでいるものを皮切りに、李白と杜甫を中心に様々な漢詩を鑑賞させ、視野を広げさせたい。そして、漢詩が日本文学に与えた影響力についても意識させたい。

『おくのほそ道』に出てくる俳句（俳諧の発句）は有名なものも多いが、「俳諧紀行文」として読んだことはない。古文は学年を追うごとにスムーズに音読できるようになってきてはいるが、まだまだ抵抗を感じる学習者も多い。

学習集団としてこの学級は、おちついている。男女の仲もよく、グループ活動においても相手を尊重しながら仲よく活動することができる。挙手による発言は多いとは言えないが、深く考えることができる学習者が多い。読解力や古文の音読力、発言力などについては個人差が大きい。仲間との暗唱や「さりはか一ど」による意思表示などには積極的に参加できる。現在の学習者には多少抵抗感のある文章や学習課題を与えることになるが、難しいことに皆で取り組もうとする姿勢をうながし、学びあいを活性化させていきたい。

## 2. 7 第3教材『おくのほそ道』に関する教材観

『おくのほそ道』は3年間の古典学習の最後に位置づけられる。紀行文は本教材のみである。昔の人の旅の様子、またそこに生まれる思いについて、様々な考えをめぐらせたい。俳諧紀行文であることから、第1教材の「近代の俳句」との関連も持ちながら指導していきたい。

また、リズムのよさに定評がある文章である。ゆえに、これまでの古文の学習同様、繰り返し音読することで、そのリズムを味わわせていきたい。

「冒頭部分」には、芭蕉の人生観そのものが語られている。簡潔な表現の一つひとつが緊張感を持ち、旅の決意とあこがれが強く語られている。学習者には、現在では予想もできない苦勞の旅であることと、強い決意があることに注目させて読ませたい。

教科書に掲載されている「平泉」は、『おくのほそ道』前半のクライマックスともいえる。「平泉」の前半（高館）では「変わらぬ自然の勢い」と「人工的なもの・人間の歴史のはかなさ」を対比しているのに対し、「平泉」の後半（中尊寺）では、「変わらぬ人工物への感嘆」が述べられている。松尾芭蕉がこの旅によって主張することになった俳諧の理念「不易流行」を考えるさい、この教材のように、「平泉」全文を読ませることは必要である。

なお、「不易流行」は荘子の言葉とされている。

「不易」は、「永遠不変であること。たとえ時がたとうとも変わらないもの。」

「流行」は、「その時々に応じて変化すること。時とともに移ろいゆくもの。」

この言葉を芭蕉は俳諧の世界に取り込んだ。「不易流行」とは何かをめぐり、様々な解釈が存在する。

- ・芭蕉は、芸術というものは一見相反するかに見えるこの二契機の二重奏的合奏においてのみ、真に永遠たりうるものだ、と考えるにいたったのである。（『松尾芭蕉』桜楓社 136ページ）
- ・不易を和歌性、流行を俳諧性と把握して間違いないと思う。一句が和歌性と俳諧性の二つながらを獲得し得ている場合、それは理想的な作品ということになるのである。

(復本一郎『芭蕉俳句16のキーワード』日本放送出版協会 98ページ)

- ・俳諧は観念やただの風物、自然を詠むばかりではなく、目の前の事実、人間の本质をも詠まなければいけないということ。
- ・世の中は移り変わっていく。その、「永遠はどこにもない」ということこそが、永遠に変わらない真理である。

など、いろいろな解説がされているが、「先師はじめて俳諧の本体を見つけ、不易の句を立、また風は変ある事をしり、流行の句変あることを分ち教えたまふ。」(去来抄より)とあるように、「不易」と「流行」の2つが備わっていることが必要ということでは一致している。

学習者にも大変難しい考え方ではあるが、「平泉」の読みを通して松尾芭蕉の発見を追体験するとともに、自分の目の前にある事実やこれからの生き方の中にも、「不易流行」の考え方は応用できることに気づかせ、『おくのほそ道』の読みが現代の自分の生き方にもいかせること、つながっていることを実感させたい。

なお、教科書には掲載されていないが、「立石寺」も読ませる。「立石寺」では、芭蕉が何回も俳句を推敲していることにふれさせることで、芭蕉の思いが深まっていく様子をさぐると同時に、一つのことを何年も追究していく姿を知らせることで、学習者が自分の言葉にこだわり、自分の作品をさらに大切にしていこうとする姿勢を期待したいからである。

## 2. 8 研究主題とのかかわり

学び合う姿には多様性がある。「学習者が作品と正面から向き合うことで、作品から学ぶ。」「学習者が教師から学ぶ。教師も学習者から学ぶ。」「学習者同士が刺激を受けて学び合う。」。このように、多様な姿が複雑にからみあい、様々な形の「学び合い」が可能になる。そもそも「学び合い」は、集団で学ぶさいには自然発生的にも起こるものであるが、それをさらに効果的に「学び合える」よう環境を整え、うながし、認めるのが、教師のつとめである。

単元をとおしての本実践で述べるならば、教師は以下のような場面で、「学ぶ意欲」を持てるような「学び合い」を仕組んでいる。

- ・国語の班あるいは近くの仲間とともに音読や暗唱練習。
- ・仲間とともに話し合うバズ・セッション。
- ・ネームプレートを黒板に貼ることで、自分の立場を意思表示したり仲間の考えを知ったりする。
- ・通称「さりはか一ど」(座席表型の自己評価) ※2.9 を参照されたい。
- ・同じテーマ、あるいは違うテーマを選んだ者同士がフリー・トーキング。
- ・プレゼンテーション(音声発表・レポート)など。
- ・既習教材や、教材化されにくい場面なども積極的に扱い、重ね、つなげて考えさせることによって、学習者の視野を広げたり深めたりする。

学習者が「学び合う」ことの楽しさと達成感を実感できるよう、努力していきたい。学習者が「学び合う」ことの有意義性に気づけば、自発的にさらに深めていこうとする意志が生まれ、「意欲」・「生きる力」・「生涯学習の力」にもつながっていく。

そのさい、根拠となる表現に着目させることで、「言葉の力」に着目できるように指導していきたい。

## 2. 9 自己評価座席表(通称さりはか一ど)(ミニ・ポートフォリオ)について

さ…今日の学習の参加度(4・3・2・1の4段階で自己評価)

り…今日の学習の理解度(4・3・2・1の4段階で自己評価)

は…今日の発見を簡潔にまとめる。

か…今日の一口感想

人…今日の学習の中で心揺さぶられた人(筆者・作者・登場人物・学習仲間・教師など)

これを毎時間、学習の最後に、縦6cm、横3cmの小さな用紙に書き、座席表の位置関係と同じように

A 3版の台紙に貼る。指導者はその日のうちにB 4版に縮小印刷し、配布。次の時間の初めに、復習を兼ねて読みあう。

授業者から見ると、この1枚でその1時間の学習集団の到達度・全体的傾向・学習者の実態が把握できる。これを毎時間積み上げることにより、ポートフォリオともなりうるので、一人の学習者の学びの軌跡を知ることにもできる。

学習者から見ると、全員の紙面発言の場となるので、意思表示や意見交流ができる。また、お互いの自己評価を知ることになり、評価の仕方も学んでいくことになる。

## 2. 10 第3教材『おくのほそ道』の目標

- ① 『おくのほそ道』の本文を音読し、リズムカルな文体を体験することにより、古文を読む楽しさを味わう。
- ② 俳文や俳句に描かれた人間の描写、情景描写を通して作者の心情を読み取り、作者の思考について自分なりの考えを持つとともに、自分の生活との対応を意識する。

## 2. 11 第3教材『おくのほそ道』の学習指導計画（6時間扱い）

第1次 『おくのほそ道』の概要を知る。（文学的知識）（0.5時間）

第2次 『おくのほそ道』の冒頭・平泉・立石寺の部分から、作者の見た情景や心情を読み取る。

（5時間）

第1時「冒頭」を読み、芭蕉が旅に出る動機と決意を推測したり当時の旅の様子を想像したりする。

第2時「つぼのいしぶみ」を読みながら、不易流行の考え方や芭蕉と平家物語との関連を知る。

第3時「平泉」（前半）を読み、悠久の自然（変化しないもの）とそこに展開された人間の歴史（変化したもの）の対比に気づく。（本時）

第4時「平泉」（後半）を読み、変化するべきものの中に変化しないものがあつたことに気づいたうえで、松尾芭蕉による「不易流行」の考え方についていろいろに考えをめぐらす。

第5時「立石寺」を読み、芭蕉が幾度も俳句を推敲したことを知ったうえで、芭蕉の思いが深まっていく様子をさぐる。

第3次 『おくのほそ道』全体を振り返り、作者の生き方・考え方に対する感想や、俳文・俳句の表現に対する感想をまとめ、発表しあう。（0.5時間）

## 2. 12 第3教材『おくのほそ道』の、評価規準

観点	評価規準	評価規準の例
関心・意欲・態度	1 意欲を持って、古文を音読・暗唱したり仲間との話し合いに参加したりする。	B 繰り返し音読することで、抵抗なく音読することができる。 B 芭蕉のものの考え方を理解しようと努力することができる。
読む能力	1 俳句と俳文との関係をとらえる。 2 古文を読み、その中にあらわれている人間・社会・自然についての考え方を知り、自分の意見と比べている。	B 俳文で書かれていることを凝縮した形で俳句がおかれていることに気づくことができる。（例 俳文において「変化したもの」と「変化しないもの」が対比されていることが、「夏草や」の俳句においても同じであること。） B 芭蕉の考え方を自分の身の回りにある考え方・事実と照らし合わせることができる。
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	1 注意深く芭蕉のものの考え方を読み、共感することができる。	B 古語の意味や用法を理解し、芭蕉の考えや表現に対して、的確な言葉を用いて述べようとするすることができる。

## 2. 13 前時までの流れと学習者の様子

『おくのほそ道』の概要、文学的知識を確認。題名の表記の問題や、芭蕉の紀行文と曾良の日記との食い違いの存在（情報の加工）などに興味を持った者が多い。

冒頭部分を読み、「旅に出た理由・きっかけ」を中心に読みとる。当時としては高齢者でありながら、漂泊の旅に出る決意をかためたことに対して、学習者は旅の辛さを思いやり、「旅に生き旅に死ぬ」ことへの尊敬の念を抱いた。と同時に、「自由気ままでいいな」というような、気楽な旅というイメージを持った者もいる。「歌枕」の存在を知り、今はやりのアニメ的「聖地巡礼」との共通点を考えて、芭蕉との距離が近づいた者もいた。

冒頭には書かれていない旅への決意（これからの俳諧はどうあるべきか模索）を確認し、壺の碑のところでは歌枕がくずれはてて失望する様子を口頭で知らせた。前半のクライマックスである平泉について、音読1回。藤原三代の系図と源義経との関係をざっと説明した。そのため、旅の苦労は学習者には伝わらない。義経を死に至らしめた頼朝の（ずる）賢さのほうや義経への同情に気持ちが向いた。また、既習の『平家物語』と芭蕉との関連に興味を持ったり、同じく2年時に既習の説明文にあった「動的平衡」と芭蕉の「不易流行」との共通点を指摘したりする者もあった。既習事項が次々とつながってくることに興味を持った。

## 2. 14 本時の学習

### ① 本時の目標

- ・『おくのほそ道』の「平泉の前半」を音読することに慣れる。
- ・この教材文を「変わらないもの」と「変わったもの」とに分けることで、両者の対比が描かれ、それゆえに人の営みのはかなさを感じた芭蕉の感慨に共感するとともに、きちんと分けきれないものの存在があることに気づく。

### ② 本時の展開

学習目標	学習活動	指導上の留意点	「意欲」「学び合い」を促す場面
1 (国語係の生徒による)百人一首クイズ	・国語係が司会をし、百人一首のはじめの五文字をもとに、皆で2回音読をする。	・毎時、初めの3分間を係の生徒主体で行う。(モジュール)	・全員で声をそろえて音読する。
2 前時の授業記録ノートに書かれた学習感想音読	・前時の授業記録ノートに書かれた学習感想を、本時の記録係が音読するのを聞き、前時の学習を思い起こす。	・前時の学習を思い起こさせることが目的である。と同時に、もし指導内容の不徹底が判明したら、教師のほうから補足説明する。	・仲間の感想を聞くことで、自分の感想と比較する。
3 前回の「さりはカード(自己評価カード)」を検討する。	・前時に仲間が書いた自己評価を読みあい、二人程度にしぼって、感想や質疑応答を話し合う。	・「さりはカード(自己評価カード)」について さ→授業参加度 4段階 り→授業理解度 4段階 は→今日の発見 短文 か→一口感想 短文 人→この1時間の中で心ゆさぶられた人を、各自が小さい紙に書き、全員分を印刷したものを、いわば、自己評価カードをお互いに情報公開することで、意見交流にもなるし、ミニポートフォリオにもなる。	さりはカード(自己評価カード)を読みあい、仲間と紙面意見交流する。その中の一部は、音声による意見交流となる。
4 平泉(前半)における芭蕉の心情を思いやる。	・芭蕉は高館で何をして、何を考えているかを考えながら、一斉音読する。	・本文を一斉音読する。 ・気づかせたいところは、「涙を落としはべりぬ」であるが、そのほか「一睡のうちにして」「田野になりて」「功名一時の叢」という表現を挙げる生徒もいるだろう。あるいはあちこちの地名を指摘し、ぐるっと周りの景色を見ている芭蕉を思い浮かべられるかもしれない。どれにしても、その表現を根拠とする理由を述べさせながら、芭蕉がはかなく消えた人の営みを感慨深く思っている様子を読みとらせたい。	・一斉音読しながら仲間の声をきく。 ・表現を根拠にしながらいちいち指摘する態度を大切にす。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芭蕉になったつもりで、「ああ、〇〇だなあ」とつぶやく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ああ、〇〇だなあ」とつぶやくことで、芭蕉によりそって心情を考えさせる。数人に発表させ、時間の圧力にもろくもくずれた人工的なものや人間の歴史のはかなさを実感させる。</li> <li>予想される反応「ああ、むなしいなあ。悲しいなあ。」など。</li> <li>・あまり内容を理解していないようなら、平泉再現図をもとにしなが、昔あった建物や庭園も今は田畑や草むらになっているという現実をおさえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>仲間のつぶやきを聞きあい、自分の考えたものと比較する。</li> </ul>
5 「夏草や～」の俳句の意味をとらえながら、芭蕉が杜甫の『春望』を引用した意味をさぐる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ高館の場面で「国破れて山河あり」の句を引用したのかを考え、発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「夏草や～」の俳句に注目させ、芭蕉が目の前にしている情景と杜甫の漢詩との共通点(昔栄えたものが今はなくなり、自然だけが残っている。)に気づかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢詩と俳句の比較をすることで、共通点を明確にする。</li> </ul>
6 3年次の既習「采女」の歌との共通点をさぐる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「采女の～」の歌と「夏草や」あるいは杜甫の漢詩との共通点を話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「采女の袖ふきかへす明日香風 都を遠みいたづらに吹く」(『万葉集』巻1-51 志貴皇子)の歌は、本校が3年生の京都・奈良・飛鳥方面への修学旅行「人と文化」において伝統的に行ってきた、甘樫丘で歌う「万葉歌碑の歌」である。この歌の内容は既習であり、学習者にとってもなじみが深い。まして都もなにもなくなってしまった現地に立って志貴皇子の心情にふれたという共通体験がある。この教材を投入することにより、昔栄えた人の営みが今は失われ、自然物だけが存在するというむなしさを表現した芭蕉に迫れると考えたのである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習教材の投入により、思考をスムーズにする。</li> <li>・仲間と話し合いたい気持ちにさせる。今回は自由に話し合わせたいので、班の形は作らない。一人で志向を深めてもよいし、仲間と話し合って交流を深めてもよい。</li> </ul>
7 対比することで協調されるものは何かを考え、詩・短歌・俳句の読みを深めていく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対比されることで協調されるものは何かを考え、発表しあう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔と今を対比する場合、昔を強調したい場合と、今を強調したい場合と、今も昔も両方の特徴を示したい場合とがある。何もなくなった現在の虚しさを強調したいという読みはできるだろうが、なぜ昔の繁栄を出してきたのか、考えさせたい。</li> <li>・「夏草や」の「や」が切れ字であることを指摘し、この句の感動の中心が「夏草」であることを確認する。戦いを必死に生きた、昔の兵士たちの活躍ぶりを表現したからこそ、夏草だけになってしまった現実のむなしさ、無常観が募るのであることに、気づかせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲間とフリートークで話し合わせることで、自由な意見交換を期待する。</li> <li>・仲間の発言を聞き、それを受けとめて考える。</li> </ul>
8 人間の営みと自然との対比であることを認識する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まとめとして、栄えていた昔と何も無い今とは、何と何を対比しているのかを考え、発表しあう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの学習の中で、学習者の中から「人間の営み」対「自然」という構図が指摘されれば、これをまとめとする。もし気づいていなければ、都や戦いを作った(引き起こした)人間の存在に気づかせたり、今ある草・風を自然といいかえたりすることで、大きな構図でこの作品を見る価値に気づかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>仲間の発言を聞き、それを受けとめて考える。</li> </ul>
9 本時の学習について、「さりはカード(自己評価)」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習内容を思い起こしながら、各自が「さりはカード」を書き、台紙に貼る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自が学習の振り返りを行う時間である。ここで書いたものは、次時のはじめに全員で検討することになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次時のはじめに意見交流するための資料となる。</li> </ul>

③ 本時の評価

観点	評価規準
国語への関心・意欲・態度	B 平泉（前半）を、歴史的仮名遣いを意識しながら音読し、独特のリズムを感じている。
読む能力	B 松尾芭蕉がいただいている、人の営みやの無常観を読み取り、芭蕉の涙の内容や心情をことばにあらわそうとしている。 B 複数の漢詩・短歌・俳句を重ねて読むことで、昔の繁栄を表現することで何も無い現在を強調するという共通点に気づいている。
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	B 歴史的仮名遣いに注意し、古語と現代語との発音やリズムの違いを実感することができる。 B 俳文と俳句との関連に気づき始めている。

### 3 指導の実際

#### 3.1 指導の概要

前時の「さりはか一ど」分析を行い、振り返りをした後に、「平泉 前半（高館）」の読みに入った。一斉音読はしたものの、内容読解ができていないことをふまえ、「今、芭蕉はどこにいるか」を地図上で指し示させた。案の定、なんとなくここかな？という感じであったので、証拠を求めた。その結果、真剣に学習者が読み始めた。「まず高館にのぼりて」を発見した男子によって、この問題は解決した。芭蕉が座り、泣いているところまで確認した。

T「では次に、芭蕉になりきって、泣きながら『ああ、〇〇だなあ。』とつぶやくとしたら、どんな言葉が入るかな？」

（フリートーキング。一人で考えてもよし、近くの間と意見交流してもよし、である。機械的に4人班にしないのは、今回は緩やかな話し合いの形にすることで、一人でじっくり考えるか、仲間と意見交流をするか自由に選べるようにしたかったからだ。この形式の場合、発表者は一人でも、ネームプレートはその仲間全員を黒板に貼ることになる。）

S1（他4人）「ああ、感激だなあ。…行きたい行きたいと思っていたところについに来たから。」

S2「ああ、なんでこうなってしまったんだろう。…ここに来られた嬉しさもあるけど、来てみたら草ぼうぼうの姿だったんで。もっと保護しろよ！」

S3（他4人）「ああ、変わってしまったなあ。…『国破れて山河あり』っていう『春望』の漢詩を出してきたから。そして、ああ、無常だなあ、って思っている。」

S1の読みは、まだしっかり読めていない状況を示している。これまで芭蕉は平泉に来たがっていたし、当時の旅が大変なものだったという知識からの推測にすぎない。

また、S2はS1の意見を受けて、実際に芭蕉が現地の様子を見てどう思ったかを述べている。「もっと保護しろよ！」の言葉は、芭蕉が古戦場への思いを積極的にしたという意味で、S1よりは読んでいる。この授業では扱わなかったが、この発言は板書に残し、次時の「平泉 後半（光堂）」の読みのところで扱うことができ、S2は満足げな表情を浮かべた。

S3はこれまでの中では一番、芭蕉に寄り添って読みを深めているといえよう。彼らの発見を全員のものとするため、「なぜここで芭蕉は杜甫の『春望』を引用したのか。」を発問した。これについては、既習である『春望』の読解がいかされ、スムーズに展開した。

国 破 山 河 在

城 春 草 木 深

昔栄えたのに

← →

今は変わった。

昔、建物

← →

今、草しかない。

昔、奥州藤原氏 人工的なもの、人間の営み

← →

自然しかない。

学習者はこのように、この両者を次々に比べたのちに、「対比している」「落差を大きくさせている」という言葉を述べた。今回、「対比」「落差」という言葉は是非引き出したかったので、これに学習者が気



づいたことはよかった。ただしこの発見は、まだ全員のものではない。さらに一押しする必要がある。

そこで、彼らにとってもう一つの既習事項である、「万葉集 采女の歌（巻1-51）」を投入した。この歌は本校の修学旅行「人と文化」において全員が甘樫丘にのぼって歌う歌であり、彼らは既にそれを共通体験していたから、歌の内容や体験したことを思い出すのは容易であった。

T そうして芭蕉はここで、「夏草や」の俳句を作るのだけれど、これに似た歌を、既にみんなは知ってる。3年生になって習って、みんなよく知ってる…。

S（「采女の歌だ！」のつぶやきに、あちこちで「ああ！」という納得の声。きょんとしている者もいる。）

T（「夏草や」の俳句と「采女の歌」の短歌を並列して黒板に提示したのちに）この2つの共通点は何かな？

夏草や 兵どもが 夢の跡

采女の 袖吹き返す 明日香風 都を遠み いたづらに吹く

S 4（他1人）「同じように高い所において、昔繁栄していたけれど、今は自然を感じるのみということを感じている。」

S 5（他1人）『「夢の跡』と『都を遠み』というところが同じ。』

S 6（他3人）「作者が、昔繁栄した場所を振り返って見ている。何もなくなった。無常。」

S 7（他3人）「補足ですが、平泉も奈良の都も、今は荒れ果てているというところが大切。」

S 8（他4人）「都がなくなってしまったということをやった歌。虚しさがこみあげてくる感情。」

ここでさらに、「夏草や」の俳句には切れ字「や」があることに気づかせ、俳句の感動の中心が「夏草」にあることをおさえた。その結果、学習者は、「兵どもが真剣に戦った様子」と対比することで、「夏草しかなくなってしまったむなしさ」の表現を強調するという構図に気づいたのであった。

### 3. 2 学習者の反応と到達点

この授業で彼らが書いた「さりはか一ど」を分析すると、次のようになる。

- ・「人の営み」対「自然」、「繁栄」対「無」、「昔」対「今」というように、さまざまな「対比」がある。
- ・「昔の繁栄」から「今の草のみ」への「落差」が、むなしさを伝えるのに重要な役を果たしている。
- ・芭蕉の句と采女の歌にこんな「無常観」という「つながり・共通点」があったとは思わなかった。びっくりした。意外なところに共通点があって、おもしろい。
- ・高館で昔繁栄していた所を見たといわれてもあまりピンとこなかったが、甘樫丘を思い出すとわかりやすかった。（「さりはか一ど」19女子）
- ・いつの時代も感じることは同じと思った。（10女子）
- ・切れ字が一番強調したいところに来るという勉強が、今日実感できた。

また、授業の記録をとった者はこのような学習感想を書いた。

・また、対比が出てきた。『春望』や『絶句』といった漢詩のときにも、自然と人間の対比が出てきたが、今回も対比をすることで、言葉を目立たせていると思った。「夏草しかない」とは言わず、「兵どもが夢の跡」とすることで、今、夏草しかない状況がしみじみとわかるように表現するところが実に芭蕉らしく、私にはできないと思った。また、何もなくてもその場所に行けば感動することもあるのだ、と思った。人工的なものと自然を対比するパターンが、詩は大好きだな、と思った。

### 3. 3 その後の授業と、学習者の変容

次の時間には「平泉 後半（光堂）」の読解である。前時に「人の営みの繁栄ぶり」から「自然のみ」への変化によって無常観を実感できた学習者であるが、ここでは芭蕉が書いた記述を図に表すことによって、人が作った光堂が永遠の命を得て現在も光り輝く様子を学ぶことができた。つまり、歩いてたった30分程度の場所ではあるが、芭蕉は「平泉」において「変化するもの」と「変化しないもの」を目の当たりにし、想いを深めていくことができたのだ。





つるまで」という表現を使う芭蕉の、言葉の豊かさには驚かされた。さらに、今回の授業で、文章をきちんと丁寧に読むことで、光堂がどうなっているのか、場面がきちんとわかることもわかった。古典でも場面を想像しながら物語を読むと面白いと思った。

その後、「立石寺」では何年も推敲を続けて到達した「閑さや 岩にしみいる せみの声」について、「小松」では空しさの表現としてこおろぎを出し、「むさんやな 甲の下の きりぎりす」を作ったことを、また最後の大垣では、旅の始まりの句と対応していることに触れ、各自がまとめの文章を書いて、この学習を終えた。

## 4 成果と課題

### 4.1 成果

「平泉 前半（高館）」の授業では、芭蕉の俳文・俳句をざっと読み、引用されている『春望』との比較をした段階では、学習者は、なんとなくわかったような気がしていた段階であった。

そこにさらに、既習事項でもあり彼らの共通体験でもある「采女の歌」を投入することにより、学習者には実感を伴ってイメージできることとなった。「夏草や」と「采女の歌」との共通点を考えさせることにより、そのイメージはさらに明確になった。また、学級の雰囲気として、一人でじっくり考えてもよいし、まわりの仲間と自由に語り合ってもよいという、思考を深めたり広げたりしやすい環境があった。これらが相互効果をもたらし、結果的に「深い学び」となっていった。

学習者は日ごろから、「さりはか一ど」・「ネームプレート」などの仕掛けにより、学習仲間がどんなことを考えているのかがお互いにすぐわかるシステムを持っている。ゆえに、語りやすい状況にあった。

また、学習者にとって、修学旅行で学んだ歌と松尾芭蕉の俳句がつながるなど、意外な結びつきであり、そこに学びの面白さを感じとつてもいた。

これらの理由により、学習者は学習の最後には、より深い学びを獲得できたと言える。

また、こうした体験は、新たな「学習の意欲」を生む。複数の作品を比べて読むことにより、「対比」、「言葉へのこだわり」、さまざまな教材を「つなげて」読もうとする姿勢、といった視点や態度が生まれ、学習者はどんどん発展させて意欲的に読むことができた。

最後に、芭蕉の提唱した「不易流行」を自分の生活におとしこんで考えるとどうなるかを考え、各自の生活に生きる「不易流行」の考え方を文章に表現していった。この活動により、さらに芭蕉と学習者とが近づいていった。

### 4.2 課題

今回の実践では2つの課題を得た。

1つ目は、『おくのほそ道』の文章を丁寧かつスモールステップで読み味わう時間がなかったということである。たくさんの教材を比較検討することにより、あるいは大きな学習課題を解決させようとする事により、古典を読もうとする意欲は活性化できたのだが、読みの個人差に対応できるだけの時間がなかった。ゆえに、読み間違いをする学習者の存在を知ってから間違いに気づかせていくという形になった。たくさんの教材を大きく扱うことにより、ピンポイントで扱いたい表現以外は概要がわかればよしとしたのだが、限られた時間の中で、古典の読解力をつける手立てについては、さらに研究が必要である。

2つ目は、「采女の歌」を『おくのほそ道』の学習に投入したことについてである。授業参観をしてくださった方の多くはよいアイデアとして受けとめてくださったが、こういう形で芭蕉の想いに迫らせていくのはいかがなものか、というご意見もちょうだいした。芭蕉の想いに迫れてより深い学びが期待できる教材にはどのようなものがあるか、これからも追究をしていきたい。